

『吉日鑑曾我』の首尾

—— 大津の芝居と宇治一派 ——

川 端 咲 子

はじめに

一、成立事情

二、粹組み部分と歌舞伎狂言

三、首巻末尾「口上」部分の検討

四、京・大坂・江戸の浄瑠璃太夫——宇治加賀掾を中心に——

五、都一中との関係

六、大津の芝居——宇治一派との関係——

おわりに

宝永七年に刊行された青木鷺水の浮世草子『吉日鑑曾我』は、甚だしく演劇色の強い作品である。全七巻の内、首巻と尾巻に挟まれた一巻から五巻が、首巻尾巻の登場人物が見物した浄瑠璃の内容という、いわゆる入子型劇中劇の形式を取っており、その部分には浄瑠璃らしさを醸し出す工夫が凝らされている。劇中劇部分だけではなく、首巻と尾巻においても歌舞伎のお家騒動物を意識した筋立て、台詞劇である歌舞伎を彷彿とさせる会話のみで進む文体の利用を見ることが出来る。当時の演劇の様子を知る補完資料としても、首巻末尾にある人形浄瑠璃の口上部分は、当時の口上の形態を知る資料となるだけでなく、当時の演劇界、特に京都の浄瑠璃界の情報が読み取れる。また、あまり明確な情報のない大津の芝居についても示唆するところがあるのである。

はじめに

浮世草子と近世演劇の間に、相互に深い関連があることは、今更いうまでもないことである。浮世草子研究の立場からは、例えばいかに演劇が利用されているかを探ることから、浮世草子の制作環境あるいは作者について窺い知ることができる。演劇研究の立場からは、純粹な演劇資料だけでは明確にならない演劇の上演環境などを立体的に考察していく際に、浮世草子は有用な補助資料として十分に利用できる。浮世草子に書かれている物語はフィクションではあつても、そこには描かれる演劇的環境が全くの絵空事であるはずはなく、当時の実際の様子を何かしら示しているといつて間違ひはないからである。

ここに取り上げる浮世草子『吉日曾我』は、その構成、題材、文体など多くの面で演劇的趣向が盛り込まれた作品である。盛り込まれすぎたが故に文学作品としては緊密性を欠く結果となっていることは否定できない^①。しかし、演劇研究の立場からこの浮世草子を見るならば、非常に興味深い作品であるといえよう。本稿では、『吉日鎧曾我』の外枠の物語が綴られている首巻と尾巻、ことに首巻の末尾にある「口上」を元に、演劇資料としての浮世草子という観点からその様相を探っていく。

『吉日鎧曾我』は、大阪大学所蔵の本が現存する唯一の本であり翻刻もないため、本題に入る前にその成立事情や七巻の構成などについて述べておきたい。

一、成立事情

宝永七年三月刊行、七巻七冊の浮世草子『吉日鎧曾我』については、すでにいちど簡単な紹介をしている^②。一部重複するが、その成立事情等を、先学の指摘を含めて改めて述べておく。

この本について早く尾崎久弥氏が『甘露堂稀覯本攷覽』^③で紹介されている。ちなみに、拙稿で紹介した大阪大学所蔵本は、印記に「甘露堂」とあり、尾崎久弥氏の紹介された本であることがあきらかであり、なおかつこれが現存する唯一の完本である。続いて長谷川強氏の「浮世草子年表」(宝永元年以前)^④の宝永七年の項に掲載されている。長谷川氏はこの浮世草子の作者について、序文末尾の署名「作者若松梅之助序」の後の「白露園」の印から、青木鷺水の作であることを考証されている。

宝永五年出雲路四郎兵衛・菱屋治兵衛刊、青木鷺水作の浮世草子『古今堪忍記』には、「此次二^⑤近世芭蕉翁諸国物語 全部六冊 同 流風 吉日鎧曾我 全部八巻 此二色追付出来仕候」という広告が巻末にある。広告と現存する『吉

『日鐙曾我』とは巻数が異なり、当初『吉日鐙曾我』は出雲路四郎兵衛と菱屋治兵衛から、宝永五年から間もなくの内に、全八巻の体裁で刊行されるはずであった。しかし現存本の刊記には、「宝永七歳寅三月吉日／江戸書林(空白)／京書林 丹波屋茂兵衛版／同 西村市郎右衛門版」とあり、本来企画されていたのとは異なる書肆から刊行されている。ちなみに、丹波屋茂兵衛と西村市郎右衛門による浮世草子は、この後、正徳三年の『宗祇諸国物語』再印本がある。この点について藤川雅恵氏は、宝永七年以前に、作者と書肆菱屋治兵衛との間になんらかの確執が存在した事を推測されている。現存する『吉日鐙曾我』の刊記は、「江戸書林」とありながら書肆名が空白である。そこに書肆の間での何らかの問題を読み取ることが可能かもしれない。あるいは現存本は初版ではない可能性もある。ただし、現時点では不明としかいいようがない。

ところで、作者青木鷺水は、『吉日鐙曾我』以前に『御伽百物語』(宝永三)『近代因果物語』(宝永四)『古今堪忍記』(宝永五)『新玉筍』(宝永六)という浮世草子を世に出している。もう一作の『高名太平記』は刊年不明。これは、いわゆる赤穂義士物の一つであり、当然長編小説であるが、『新玉筍』まではいずれも雑話物に属する短編集である。宝永七年刊の『吉日鐙曾我』は、青木鷺水にとって

初の長編であった可能性が高い。その辺りに刊行の遅れなどの原因を想定することもできよう。

二、枠組み部分と歌舞伎狂言

『吉日鐙曾我』は題名からも明らかなとおり、『曾我物語』を題材とした、いわゆる曾我物の浮世草子である。宝永七年の時点で、曾我物の浮世草子は、西沢一風の『寛瀬曾我物語』(元禄十四)を始めとして何作も書かれていた。また、浄瑠璃や歌舞伎の世界においても曾我物は多く上演されていた。原典である『曾我物語』自体、多くのエピソードを伴う長編の物語であるが、近世になると、そこから派生した曾我物により、さらに多くのエピソードが『曾我の物語』として付加されていった。おそらくは初めての長編を執筆するにあたり、エピソードが多いが故に下敷にしやすい曾我物を作者があえて題材として選んだことは想像に難くない。ただ、曾我物の作品はもうすでに多く世に出ており、新たな曾我物としては、何らかの新機軸が必要であった。その一つが、『吉日鐙曾我』を「吉日鐙曾我」という題名の劇中劇にしようことであった。入子型劇中劇の趣向もまた浮世草子のなかでは珍しい物ではないが、『吉日鐙曾我』の場合、さらにその外枠部分を、歌舞伎を彷彿とさせる「玉すだれ家のお家騒動」という物語に仕立

ている。首巻尾巻の粗筋は以下の通りである。

首巻は、京の豪商井筒屋傳七の家から始まる。傳七の娘松姫は、津の国勝の郷の玉すだれ恋の丞と許嫁の仲である。近日中には婚禮と賑わう井筒屋に、玉すだれ家からの使者が到着し、婿の恋の丞が病氣のため婚禮を延引したいと告げる。玉すだれ家へ赴いた井筒屋の手代平九郎の働きで、恋の丞の病は玉すだれ家を乗っ取ろうとする悪人の策略と知れるが、多勢に無勢の中、恋の丞は身を隠し家は乗っ取られてしまう。

その後、許嫁の行方を尋ねる松姫は、三井寺の観音に参詣し、その帰途に大津の四宮芝居で浄瑠璃を見物する。その浄瑠璃の初段から五段にあたるのが、浮世草子の巻一から巻五までという構成になっている。そして、巻一から巻五が劇中劇であることは、首巻の最後にある「口上」により明らかにされている。この劇中劇部分は、冒頭に浄瑠璃の慣用表現である「さてもそののち」が使われるなど文体も浄瑠璃風、語り物風であり、所々に浄瑠璃の文字譜である「三重」などの表記も見られる。

尾巻は浄瑠璃終演後の話で、芝居小屋近くの茶屋に來合わせた悪人が、松姫や恋の丞の妹藤姫に見とがめられ、敵討ちとなるところに、浄瑠璃太夫に身をやつしていた恋の丞が登場、悪人は滅びめでたく話は終わる。

大家の跡継ぎをめぐる悪人の姦計、当事者である若君の出奔とやつし、許嫁の姫の存在など、明らかにこれは歌舞伎のお家騒動物の要素を踏まえた筋立てになっている。これは、目録の首巻部分に

序ひらきは御定りの狂言事 藁人形の惡靈并狂言に似たるせりふ 江州四の宮の初芝居井口上の趣にて一部の仕組を申立候 (私に傍線を付した以下同)

と書かれていることから明らかである。さらに、物語の舞台が変わる所に「中入」という表記を入れて狂言本の体裁を取っている。また、最初の「中入」までを登場人物の会話のみで綴るという手法を取ること、台詞劇である歌舞伎の雰囲気を読者に一層を与える工夫をしているのである。

三、首巻末尾「口上」部分の検討

浮世草子に書かれる「口上」が、演劇資料としてどのくらいに有用であるのか。信多純一氏は元禄時代の口上の様子を窺い知る資料の一つとして浮世草子「座敷歌舞伎」を挙げられ、「この版本(元)の口上のもじり具合がどの程度ものか問題があるが、一応この文言は当時実際に準拠するもので、かなり信用出来るものであるように思う。」と浮世草子の資料的有用性を説かれている。また山田和人氏は浮世草子の口上をからくり研究の資料として利用可能

であると述べられる。⁽⁷⁾

浮世草子の作者や作品毎に当然事情は異なるであろうから、本文批判をしつつも、純粹な演劇資料からは知り得ない情報を含み持つものとして、浮世草子を取り扱ってよいであろう。そこで、以下に首巻二つ目の中入り以降の本文を挙げて、『吉日鑑曾我』の場合、どの程度当時の實際の状況と一致するのかを検討する。まずは、長くなるが口上部分引用する。(引用本文はいずれも適宜私に漢字を宛て句読点を付し必要なところに傍線をほどこした。)

(前略)御許嫁の聲君つゝがなく御入あるためとて、供まはりの人ゝ忍ひやかに添ゑられ、三井寺の觀世音に七日籠らせ奉り給ふ。①折しも当所四の宮大明神の御社にて淨瑠璃芝居始まり、今日より操りある由、大津坂本の貴賤老若われもゝと群集せり。松姫に付まいらせし御腰元中お乳の人とりゝ勧め奉り、松姫の御供し御慰みのためいざゝと御乗物に召させ参らせ、四の宮の芝居見物にといさみ進みて出立ちける東西ゝさて惣やうさまへ御断り申あけまする。先もつて今日早朝より歴ゝ様御見物に御出で下さるゝ段、太夫何かしを初、座中の者何程か忝なう存し奉ります。②則ち爰もとにおゐて語りまする淨瑠璃の外題は吉日

鑑曾我と申まして、事ふり御耳慣れまして御座りますが、曾我兄弟の身の上、大切な敵を討ちました様子を今様の世話に作りかへまして、五段続きにいたし語りまする様に御座ります。誠に古へより淨瑠璃太夫も歴ゝ御座ります中に③都に名高き加賀掾宇治好澄、都太夫一中、松本治太夫などゝ申て、おのゝめいゝの一流を語り出し、さまゝ珍しい文句を綴り、世間の御鼻眞に逢れまして、絶ず繁昌めさるゝ事て御座ります。難波の津においては竹本筑後、これ又名人の太夫で御座る。江戸で榮閑、半太夫その外あまた御座りますれば、おのゝ様もそれゝ御手近に付てそれゝの流儀を御鼻眞遊ばし、月待日待の御慰みには一節つゝ御口眞似も遊はさるゝ事て御座ります。かやうな中へ④私風情の田舎芝居、辻打の仮舞台において何程の事を致ましたればとて、おのゝ様の御目に留まり御評判に預かります程の事は御座りますまいし、殊に御馴染も御座らぬ太夫なれば、おかしう思し召すて御座りましようと思ますれとも、⑤此淨瑠璃義は先年大坂道頓堀におゐて筑後掾相談しかけられまして、取しきり急に仕組まして、春早々の初芝居に語られます筈て御座りましたを、少様子御座りまして唯今まで打捨て置まして御座りまするを、去御方西嶋にて正月

買の御機嫌の折から、何某と申末社衆を頼み、そと御目にかけて御座りましたれば、ほんとと喜悅遊ばしまして、何なりとも節を付て早々御座敷浄瑠璃に致せと仰せ付けられまして御されば、俄に頭取をこしらへ舞台からを相談し、指人形に当世のはやり役者衆の身振りを移し其夜の興を催しまして御座いますより、さなから此まゝに捨をきますも口惜しう、又は作者も事なう本意なかりますも尤に存知、此芝居を取り組みまして御座れば、台詞道具何かに付まして万不調法がちにて御目たるう御座りませうすれども、その程は御馴染みの太夫たち同前に御最肩をなされ諸事大様に御覧下さりませう。就中⑥三段目に至りまして、傾城宗門の義は京都の太夫加賀掾か直弟子宇治林太夫同半太夫同采女三人かわるゝに助まして、家の口伝を残さず節ゝを付て語られます間、ひとしほ所ゝに御心を付られ、よろしう御評判下され、此後いよく御最肩を頼奉ります。猶申あげたい義やまゝゝて御座れども、かへつて長事御退屈にも御座りませうつれば、追付け吉日鑑曾我、新浄瑠璃の始まり、左様に御心得下さりませい

「東西ゝ」以下が、四宮芝居での浄瑠璃上演前に行わ

れた口上である。口上部分の文体や構成などは、絵入り浄瑠璃本の見返し部分などに見られる実際の浄瑠璃の口上と大きく変わる所はない。以下、順不同に傍線を付した部分について考察していく。

傍線部①で、失踪した許嫁玉簾恋の丞の無事を祈つて三井寺の観世音に七日籠もる松姫が、気晴らしにと大津四宮芝居へと浄瑠璃を見に行くことになったとある。この四宮芝居については、後で述べることにする。

傍線部②は『吉日鑑曾我』というこれから上演される浄瑠璃の外題とその内容の紹介である。よく知られている『曾我物語』を「今様の世話に作りかへ」たとあるこの文言はすなわち、この浮世草子の趣向を示す文言となっている。

四、京・大坂・江戸の浄瑠璃太夫

― 宇治加賀掾を中心に ―

傍線③には京大坂江戸で当時活躍していた浄瑠璃太夫として京都の加賀掾宇治好澄、都太夫一中、松本治太夫、大坂の竹本筑後、江戸の虎屋栄閑、半太夫の名が挙がっている。これは、この当時の三都で活躍する実際の浄瑠璃太夫の状況を的確に述べていると言える。

京都の作者により京都の書肆で刊行された浮世草子であ

るためか、京都の情報が一番詳しい。第一番に名の挙がる宇治加賀掾は、宇治座という劇場の芝居主であり名代であり太夫であった。彼は、宝永八年正月に死去するのだが、宝永六年以後上演と推定されている『天満神明氷の朝日』の脇題箋の中央に太夫加賀掾、右手に宇治嘉太夫・伊太夫・甚太夫の名が記されていることから、宝永七年は晩年期とはいえ、まだ太夫として一線にいたと考えられる。この時期の宇治座についての資料は乏しい。現存する正本から、大坂の竹本座の浄瑠璃を改変した浄瑠璃が主になっていたらしいことはわかっている。かつての栄光に陰りが見えているようだが、この口上を見れば、やはり京都で一番の勢力を持ち続けていたと考えてよいようである。

後先になるが、この宇治加賀掾の弟子の名がこの後傍線部⑥に出てくる。すなわち、三段目の「傾城宗門帳」という節事を加賀掾の弟子がやって来て「家の口伝を残さず節くを付けて」語ると述べているのである。ここで実際の加賀掾の浄瑠璃と照合するならば、「傾城宗門帳」と呼ばれる節事は加賀掾の浄瑠璃には見られないが、同じく「傾城」とつく「傾城請状」（元禄十三年上演（推定）『団扇曾我』）や「傾城三部経」（宝永年間上演『曾我花橘』）といった節事は存在する。それらはいずれも曾我物語を題材とした浄瑠璃である点、注意すべきであろう。

節事「傾城宗門帳」を語るのは、加賀掾の直弟子の宇治半太夫・林太夫・采女である。宇治加賀掾の弟子については、後に野田若狭となる宇治伊太夫、後に富松薩摩となる宇治甚太夫を始めとして多くいたことが、絵入り浄瑠璃本の口絵ほかの資料から分かっている^⑧。ここに挙がっている弟子たちの中では、加賀掾の弟子分の浄瑠璃『大和歌五穀色紙』『鎌倉尼將軍』『傾城今西行』奥書にその名前を見える宇治半太夫のみ実在が確認でき、他の二人については確認できない。しかし、浮世草子『心中大鑑』には、他の資料では名前を見ることが出来ない加賀掾の弟子豊太夫なる人物が登場し、最近発見された加賀掾関連の新資料にも他の資料では見いだせなかった弟子の名があることなどを考えると、これらが完全なフィクションとも言えないのである。林太夫と采女を実際の加賀掾の弟子の一人として数えることには、いささかの躊躇を覚えるものの、半太夫が実在し、しかもこの部分であえて架空の太夫名を挙げねばならない理由もないことを考えると、彼らが実在しないとも言いが切れない。宇治派の太夫との関連については、四宮芝居について述べる際に改めて触れる。

続いて傍線部②の他の太夫についての検討に戻る。京都で加賀掾と競い合った太夫である山本角太夫はすでに死去しており、この時期はその弟子筋に当たる松本治太夫が活

動中であつた。その活動の状況については、宇治派ほどには明らかではないものの、正本の現存率からも、宝永年間京都でかなりの勢力を持っていた太夫であることは確かである。最後に挙がる都一中は、正徳年中には江戸へ下るのだが、この時期にはまだ京都にいた。一中の浄瑠璃もまた当時の京都を代表するものであつた。一中については次章でふれる。

大坂の竹本義太夫については、改めて述べるまでもないであろう。宝永二年に座本に竹田出雲、座付き作者に近松門左衛門を迎えた新生竹本座発足して五年、竹本義太夫の全盛期である。江戸の栄閑は虎屋栄閑、半太夫は江戸半太夫を指す。

五、都一中との関係

傍線部⑤は浄瑠璃『吉日鎧曾我』成立の裏話である。本来、大坂の竹本座で上演されるはずであつたが、様子があつて中止になりうち捨てられていた。ある時、さる御方の望みで座敷浄瑠璃として指人形で上演したところ、好評であつた。そこで、そのままにしておくのはもつたいないと今回舞台に掛けたというのがその内容である。竹本義太夫の語るはずであつた浄瑠璃云々は事実とは言い難い。ここには、浄瑠璃成立事情に仮託して、この浮世草子成立事情

が記されているのだという指摘があり^⑩おそらくその通りであろう。もつとも、この時期の宇治座の浄瑠璃は、先に述べた通り宇治座独自の演目以上に、大坂竹本座で上演された浄瑠璃を一部改作し節付けを換えて上演したものが多く、そうした事情を反映しているともいえる。

ところで、座敷浄瑠璃として上演されたと言うことについては、一点注目すべきことがある。先に名前の出た都一中の段物集に「鎧曾我」という浄瑠璃の名前が見られるのである。すなわち、正徳元年刊行と推定される都一中の段物集〔正徳元年一中節段物集〕に、「鎧曾我形見おくり」という曲名があり、これ以後の一中の段物集にもほぼすべてに『鎧曾我』の曲名を見ることが出来る。一中の浄瑠璃は、劇場でも上演されたが、むしろそれより座敷浄瑠璃として語られること主流であつたらしい。

辛卯福德曆 枕づくし わん久道行 助六あげ巻二度
心中道行 姫が瀧四機^{しやみ}の山めぐり 姫が瀧水の上風流
色道仙人茶屋めぐり 京三十三所観音めぐり みやこ
大めぐり 四季鳥めぐり 酒山めぐり 八百屋お七み
ちゆき けいせいしのぶ草 島づくし 鎧曾我形見お
くり 五段曾我^{ごだそうが}んぶくしゆすびん 勇士の三つ物ひ
め君うす雲道行 松つくし

〔正徳元年一中節段物集〕所収曲

さらに、『異本都羽二重』では目録部分では「吉日よろひ曾我 トラうきな川」とある。ただし本文の方では該当曲は「五段曾我 虎うき名川」とあり、その次の曲が「鑑曾我形見おくり」になっている。「五段曾我」という題名については〔正徳元年一中節段物集〕では「鑑曾我形見おくり」の次の曲に「五段曾我げんぶくしゆすびん」がみえる。つまり、浮世草子『吉日鑑曾我』刊行頃に、都一中に「鑑曾我」あるいは「吉日よろひ曾我」という浄瑠璃があり、『五段曾我』とも呼ばれていたらしいことになる。浮世草子の『吉日鑑曾我』と一中の浄瑠璃との前後関係は不明であり、残念ながら一中の段物集所収部分と浮世草子『吉日鑑曾我』には本文の一致を見ることは出来ない。一中ではもう一点、浮世草子の目録部分に「一中が山めぐりは是からおもひ付た台人形」と書かれている。目録のこの部分に当たる浮世草子本文を見ると、畠山重忠から箱王へと届けられた美しい台人形を動かすと、人形が二つに割れて中から曾我の母が出てきて、箱王に意見をするという局面に相当する。一中には「山めぐり」という節事があつたことは、段物集から分かるが、それとこの部分がどのように関係するのかは不明である。しかし、『正徳元年一中節段物集』

にすでに「山めぐり」が入っていることから、浮世草子刊行の宝永七年頃には一中の「山めぐり」という曲が知られており、ここはそれを当て込んでいることは確かである。

以上、浮世草子『吉日鑑曾我』に書かれる演劇に関する記述は、当時の現状を反映したものであると言えよう。その中で、浮世草子の舞台は津の国と京都であり、この浄瑠璃を見物した松姫は京都の豪商の娘であるのに、何故に大津四宮芝居の浄瑠璃という設定がなされたのか、大津四宮芝居とはどのような芝居であったのか、さらに加賀掾の弟子がわざわざ三段目を語りに来ると言う設定は何故なされたのか、大津の芝居と加賀掾とは何らかの関係があるのかといった疑問が起こってくる。

六、大津の芝居―宇治一派との関係―

傍線部④には、浄瑠璃『吉日鑑曾我』を上演している四宮の芝居について「田舎芝居辻打ちの仮舞台」と述べている。このあたりに挿絵があり、付け舞台や二階棧敷が備わったかなり立派な舞台が描かれている。大津四宮の芝居は次に述べるとおりの常打の芝居小屋ではなかったことを考えると、これは四宮芝居の実景ではなく、むしろ当時の京都や大坂の大芝居に近いものと思われる。この挿絵は、宝永頃の京大坂の人形浄瑠璃の舞台を知る資料として利用可能

であろう。

大津には、土橋町と四宮神社（現天孫神社）境内の二カ所に芝居小屋があつた。大津の芝居についての地誌の記述ならびに先行研究を挙げる。

A 芝居 在土橋町。四宮町と此所と二所にあり。土橋は津太夫。四宮は安房屋といふもの名代たり。其余は禁制す。（中略）京・江戸・大坂のごときは、常座と号して、常に絶ることなし。此地のごときは、間にあつて常にあることなし。

（享保十九年寒川辰清『近江國輿地志略』巻之九

志賀郡大津）

B 一、芝居

式ヶ所

内壱ヶ所	名代	宇治津太夫	土橋町二有之
又壱ヶ所	宮芝居	四ノ宮町神主持	

（国立国会図書館蔵『大津町覚』¹⁾

C 我が大津に於て最も古く土橋町に芝居あり。宇治津太夫と称するもの名代たりき。其年代詳かならざれども元禄以前より行はれしや明也。一時は盛大にして他所に興行するにも必ず津太夫の名代たらざれば許可を得ざりし程にて当時四宮町、甚七町の芝居興行にも常に此の津太夫名を以て願出でしものなりき。四宮に於け

る芝居興行は之を宮芝居と称し安房屋と称するもの名代たりき。四宮神社の頃五十日間に限られたりしが土橋町は常芝居と称したりき。然れども一年中興行を続けしにあらず。文政の頃迄春夏の雨季のみに限られしが仁孝天皇の御宇文政五壬午年にも興行を願ひ出でたることあり。後許されたりと称す。即ち土橋町と四宮町とに設けられ其余は之を禁制せり

（大津市私立教育会編『大津市志』下巻

第十四章第二節「歌舞遊戯及文藝」明治44年）

D これらの資料から窺い知ることの出来る近世大津の芝居についてまとめると、以下ようになります。1、土橋と四宮の二カ所が公許の芝居小屋。2、名題は、土橋が宇治津太夫、四宮が安房屋あるいは神主預かり。ただし、『大津市志』によれば、「一時は盛大にして他所に興行するにも必ず津太夫の名代たらざれば許可を得ざりし程にて当時四宮町、甚七町の芝居興行にも常に此の津太夫名を以て願出でしものなりき」とあり、宇治津太夫の名題で興行していたこともあるらしい。3、公許の芝居ではあるが、常芝居ではなかった。四宮芝居は大津祭りの頃五十日間のみか。

（『新修 大津市史』第四卷第三章第四節「生活と芸能」

大津における人形浄瑠璃の上演の実態については明らかではない。ここで述べられる「芝居」はおそらく主に歌舞伎が上演された芝居小屋を差すものと思われる。ABCをまとめたのがDの記述となる。

Cに大津の芝居は「元禄以前より行はれしや明也」とある。これについてはその根拠となった資料が不明であるが、元禄十年頃に四宮で歌舞伎が上演されていたことが、元禄十二年刊の役者評判記『役者口三味線』大坂之巻で確認できる。文中の「しばるの有し時」という表現からは、常の芝居ではなかったであろうことが推測される。

中ノ上 荒井半左衛門

本だて 去年大津四の宮にてしばるの有し時、此人あさまがだけのきやうげんに。花岡和田右衛門となつて實がたをやられしが。誠にいなかの山下と。見物ほうびをしけり。かやうにゐなかしばゐにて。手ならひをせられしゆへか。よほど前かたより。げいに実が入ました。(以下略)

この後、役者評判記で大津の芝居について触れたものには、享保十一年正月刊『役者拳相撲』京之巻「荻野八重桐」評に「かゝる稀人を。しばらくの内も。京地をはなし。

大津さんがい迄しんぜましし事。さりとはおのくふがない」がある。享保十九年正月刊『役者三津物』大坂之巻「荻野八重霧」評「八百屋お七の狂言。お七おばの役を。つとめられしよし。大津でもなさるゝやうに聞しが」と合わせて考えると、享保年間には常芝居に近い形での興行があつた可能性も考えられるが、元禄十二年から享保十一年の間については資料が無く不明である。「ゐなかしばゐ」

「大津さんがい迄」の表現は、『吉日鑑曾我』口上の「私風情の田舎芝居」といった表現と相通じる。当時の大津の芝居に対する京の人々の認識が浮世草子にも評判記にも如実に表れていると言えよう。それでも、大津の芝居はある程度の回数で興行が行われ、尚且つそれが人々に知られていたからこそ浮世草子『吉日鑑曾我』ではその劇中劇の興行場所を大津の芝居にしたはずであり、浮世草子『吉日鑑曾我』は、元禄から享保の間にも四宮芝居の興行があつたことを示唆しているとも考えられる。

興行の時期については、大津の芝居が常芝居でなかったことは、浮世草子の「辻打仮舞台」という記述が呼応する。ただ、浮世草子では目録部に「江州四ノ宮初芝居」とあり、大津祭りの折に興行があつたとする記述とはずれが生じる。天保頃の天津の芝居には、数点番付が残っている。それを確認すると、興行の行われた月が四宮では二月六月七月九

月十二月、土橋では四月八月十二月とかなりばらばらである（次表参照）。『吉日鑑曾我』刊行の宝永年間は、当初祭りの折のみに興行があつた芝居小屋が次第に祭りとは関わりなく興行を行うようになる過渡期の事例と見てよいかもしれない。

次の表は、管見を得た芝居番付からその情報を書き抜い

た表である。先に四宮芝居、後に土橋芝居の番付を並べた。上演年に「一」を付けたものは、番付には年の表記がないものの、座組み等から推定できたものである。土橋芝居は、干支が書かれていないこと、出演する役者で年代推定するのが困難なことから興行年不明の物が多くなる。

年	月日	劇場	名代	外題	役者	備考
天保6	7・吉	四之宮	宇治津太夫	男哉婦将門 夏祭浪花鑑 五枚続吾妻錦絵	中村芝翫 片岡仁左衛門 山下金作	同年六月京北 側芝居と同座組
〔天保10〕	12・10	四之宮	宇治津太夫	柵自来也談 置土産今織上布	嵐璃珢 嵐三右衛門 浅尾与六	同年八月四条 道場と同座組
天保12	6・5	四之宮	宇治津太夫	敵討千手護助剣 宿無団七時雨傘	嵐璃珢 市川助寿郎	
天保13	2・吉	四之宮	宇治津太夫	桂川二世柵 姫子松子日の遊	中山兵太郎 中嶋三甫蔵	
天保14	9・吉		宇治津太夫	仮名手本忠臣蔵	幡谷猿蔵 三国屋天幸	場所不明
不明	12・吉	四之宮	宇治津太夫	木下陰狭間合戦 けいごと	市川団三郎 嵐冠十郎	
天保9	12・吉	土橋	宇治津太夫	釜淵双級巴 彦山権現誓助剣	嵐璃光 片岡市蔵	

〔安政5〕	4・5	土橋	宇治津太夫	姫競双葉絵草紙 隅田川続俤	中村稻之助 市川玉十郎
〔不明〕	8・上旬	土橋	宇治津太夫	有職鎌倉山 夏祭浪花鑑	中村鴈五郎 市川鰈十郎
〔不明〕	12・6	土橋	宇治津太夫	八陣守護城 大和往来恋飛脚	尾上多摩 桐島小六
					書写

番付によると名代は、四宮土橋どちらもすべて宇治津太夫であり、安房屋の名前は見えない。『大津市志』によれば、四宮も宇治津太夫で興行していた時期もあるということなので、天保頃がその時期に当たるともかもしれない。さてこの名代である。「宇治津太夫」と、姓が「宇治」ということで、京都の名代宇治嘉太夫との関連が想像される。もちろん、「宇治」姓であれば誰でも京都の宇治派と関連づける必要があるわけではないが、以前、竹本座所属の宇治姓の人形遣いたちは宇治一派の末裔である可能性が高いことを論じたことがあり、同じ上方圏である以上、京都の「宇治」と何らかの関わりを想像することは無理からぬ事であろう。さらに、この大津の宇治津太夫については、姓だけでなく、わずかながら、京都の宇治派との関連を示唆する資料が存在する。それは番付に付されている紋である。天保六年四宮の芝居のみであるが、番付に京都の宇治座と

同様の九枚笹の紋が付いているのである。以後の紋は四つ目菱と変わる。つまり、本来、宇治津太夫は京都の宇治派に縁の者であり、それ故に天保六年頃までは京都の「宇治」と同じ紋を宇治津太夫も使っていたのではないか。その後、浄瑠璃太夫としての宇治一派が消滅し、津太夫の名代が大津で代々受け継がれる中、京の宇治一派からの派生といった意識は薄れたであろう。それが紋の変更に表れているのではないか。

もう一点、京都の「宇治」との関連を想像させる資料を挙げるならば、宇治加賀掾の墓地がある京都頂妙寺善性院の過去帳についての信多純一氏の指摘がある。

善性院蔵過去帳に「瑞之部」と「輪之部」があり、瑞之部三には宇治律太夫とあり、輪之部には宇治津太夫とある。また瑞之部一に、「享保十八年四月廿一日心融道證因州二而死 宇治律太夫事」とある人物に就て

も不詳である。浄曲界に其名を見ないので、他の芸道界の人か

宇治加賀掾の墓がある京都の頂妙寺善性院の過去帳の一つに「宇治津太夫」という名前が見えるのである。善性院の過去帳「瑞之部」と「輪の部」には重なつた記録もあれば、一方のみの記録もあり、その関係はよく分からない。おそらく、「輪の部」にある「宇治津太夫」は、因州にいた「宇治律太夫」の誤写であろうとは思われるが、加賀掾存命中にその門弟に「津太夫」という人がいた可能性も全くないわけではない。また、誤写であつても、「律太夫」という浄瑠璃正本にもその他の資料にも全く見られない人物で、しかも京都ではなく因州にいた人物が加賀掾関係者の中に記載されているということは、天保頃の名代である宇治津太夫はともかくも、『大津市志』に記された「元禄以前より行はれしや明也」とある大津の芝居の初期にいた江州の「宇治津太夫」もまた、かつては、加賀掾あるいは宇治嘉太夫関係者であつた可能性があるだろう。

先に、浮世草子『吉日鑑曾我』を挙げて、大津の芝居と宇治加賀掾には何らかの関係があつたのか、という疑問を出した。宝永頃の大津の芝居の実態については、結局不明であるが、名代「宇治津太夫」ということを考えるならば、逆に大津の芝居を書いた浮世草子『吉日鑑曾我』が大津の

芝居と京都の宇治一派との関係の深さを証明する一つの資料となるのではないか。

おわりに

宝永五年の時点で刊行が予定されていた『吉日鑑曾我』と現『吉日鑑曾我』がどの程度同じものであるのか、そもそも宝永五年にある程度の構想が既にあつたかどうか分からない。ところで、宝永五年といえ、二月四日に江戸の名優中村七三郎が没した年である。七三郎は死の直前、中村座初狂言『傾城嵐曾我』で曾我十郎を演じていた。曾我十郎は七三郎の当り役の一つである。七三郎の死は、歌舞伎はもちろんであるが、浮世草子の世界でも次々とその死を当て込んだ追悼作品を生み出すこととなつた。近松門左衛門の浄瑠璃『傾城反魂香』（宝永五年上演（推定）竹本座）もまた中村七三郎をの死を当て込んだ作品である。¹⁵青木鷺水には「丹前優男」という中村七三郎を讃えた草紙があつたという。¹⁶と考えると、一旦は挫折しつつも、宝永七年三月に改めて刊行された『吉日鑑曾我』もまた、中村七三郎三回忌を意識していたと考えるのは、考えすぎであろうか。本稿では首巻と尾巻の枠組み部分のみを取り上げて、一巻から五巻の「吉日鑑曾我」の部分には全く触れていない。当然この部分には、先行の浮世草子の曾我物、上方の

浄瑠璃や歌舞伎の曾我物の影響を見ることができるとは必ず
あるが、それと共に曾我十郎を得意とした中村七三郎の面
影もまた見ることができるかもしれない。

注

- (1) 藤川雅恵『十能都鳥狂詩』をめぐる諸問題について
『近世文芸』82 平成17年7月
- (2) 拙稿「資料紹介『吉日鑑曾我』」(『上方文藝研究』第1号
平成16年5月)
- (3) 名古屋史書会 昭和8年
- (4) 『浮世草子の研究』(桜楓社 昭和44年) 所収(後、『浮世
草子考証年表―宝永以降』(青裳堂書店 昭和59年))
- (5) 『驚水浮世草子の特徴とその版元―菱屋治兵衛との確執を
めぐって』(富士昭雄編『江戸文学と出版メディア―近世前
期小説を中心に』笠間書院 平成13年)
- (6) 『元禄期の口上について』(松蔭短期大学研究紀要』5
昭和39年2月。後に『近松の世界』(平凡社 1991年)
- (7) 『からくりと浮世草子』(同志社国文』45 平成8年12月)
- (8) 拙稿「加賀掾没後の宇治一派―加賀掾の門弟を中心に」
『演劇研究会会報』第24号 平成10年7月
- (9) 田草川みづき「新出資料・宇治加賀掾(八九杖)の紹介」
(第二十回楽劇学会大会 平成24年7月)
- (10) 前掲注(1)参照
- (11) 『大津町覚』は一冊から成る写本で、大津の町の由来から
始まり町の名を始め、およそ近世の大津の町の行政に関わる
あらゆること、大津の町の傾城屋や傾城の数までが記されて

- いる。しかし、書写年代はどこにも記されていないためここ
に書かれているのがいつの情報であるかはつきりしない。た
だ本文中に「寛延二年三月」の記述がみられるのでそれ以後
の書写であることは確実である。芝居のことについては、
「諸仲間数之事」の付けたりのような形で記されている。
- (12) 宇治嘉太夫は宇治加賀掾の受領前の名前であり、名代名で
もある。この名代は、宇治派の浄瑠璃が消滅した後も、明治
の初めまで京都の名代として残る。(拙稿「四条道場芝居考」
『藝能史研究』第15号 平成14年10月)
 - (13) 「宇治一派の未流達―宇治姓の人情遣いを中心に」(待兼山
論叢』第33号文学編 平成11年12月)
 - (14) 信多純一「加賀掾年譜」(古典文庫『加賀掾段物集』所収)
 - (15) 信多純一「傾城反魂香」試論」(『文林』6 昭和47年3
月。後に『近松の世界』(平凡社 1991年) 所収)
 - (16) 前掲注(1)参照